第２９号
２０１０年１０月２０日
日本バプテスト連盟 宣教部 教会音楽室

新生讃美歌ニュースレター NEW SONG

賛美歌は、時も空間も超えて我々を主のもとにいざなう

日本バプテスト連盟 宣教部長　野口 哲哉

今から24年前、初めて訪れた広島教会の特別伝道集会で歌った賛美歌。「むーかーし主イエスの播きたまいしー(新生389番)」のメロディに声を合わせた瞬間、西南学院高校の教室の風景がまぶたの裏によみがえってきて、心が熱くなりました。眠たそうな生徒たちを尻目に、高らかに歌う担任の内田督先生の声が聞こえてくるようでした。広島教会の会堂いっぱいに響き渡る賛美の歌声を聞きながら、賛美歌には祈りが込められているということ、神の愛がそこにいっぱいに表われ出ているということが肌から身体の中に入ってくるような感じを受けました。その後、主日礼拝に毎週出席するようになった私。イエスさまに出会って新しい生命を吹き込まれて生きるようになるまでに、それほど時間はかかりませんでした。

聖書の御言葉もさることながら、賛美歌は時を超え、空間を超えて聞く者と歌う者をつなぎ合わせてくれる神さまからの豊かなプレゼントです。かつては聞く側にいた者が今度は賛美する者に変えられていく。そんなダイナミックな出来事が賛美歌をめぐって日々起こされていることの素晴らしさを感じています。

『新生讃美歌2003』が発行されてから7年。「礼拝で使える一冊という願いが叶った！」そういう思いでうれしく真新しい『新生讃美歌2003』を手にしたことを思い出しています。以後、ずっと新生讃美歌を使わせていただいています。最初おぼえられなかった賛美歌の番号も、「いつくしみ深き」は431番とおぼえてしまうから不思議なものです。別な賛美歌集からの切り替えという戸惑いも消え去り、今では無くてはならない、自分の一部分であるように感じながら礼拝での賛美をさせていただいています。

私たちバプテストの賛美歌集としての『新生讃美歌2003』がその歴史の中で、いよいよ多くの人々に親しまれ、歌われる賛美歌集として用いられていきますように、心から祈り願っています。

第１３回　編集委員会の思い出

福永 保昭
『新生讃美歌増補Ⅰ』『新生讃美歌増補Ⅱ』
『新生讃美歌』（２００３）　　編集委員

1996年5月～相模中央キリスト教会の副牧師（青少年担当）としての仕事をはじめたのと同時に、「新生讃美歌編集委員として働かないか」と委員長の北島靖士先生から依頼があった。正直、賛美歌に関してまったくわからない者だったが、勉強になるならと引き受けた。

最初の委員会出席までにと、分厚い賛美歌のコピーを渡され、その中から選曲をしていくから判断しておくようにということだった。そのほとんどは英語賛美歌で、私の英語力ではこれをいちいちチェックするゆとりなどなかった。曲とテーマのみで判断する。ましてやその判断も、自分のこれまでの経験と好き嫌いだけで決めるという稚拙なものだった。

編集委員会に出席するごとに、他の委員の先生方の指摘や選曲のセンスなどからだんだんと賛美歌集を作るとはどういうことかを学んでいったように思う。しかし、何度か委員会を経た時、「これではいけない」という思いに迫られた。あまりに賛美歌のことを知らない自分がこの委員会にいることに、ほとほと嫌気がさしたのである。

そのころ、日本基督教団では、新しい賛美歌集『讃美歌２１』が出版され（1997年）、その紹介プログラムや講演会などが数多く開かれていた。私もその講演会に出かけ、『讃美歌２１』についてだんだん知るようになった。そればかりではなく、英語賛美歌、ドイツコラール、詩篇歌、今まで何の気なしに歌っていた賛美歌のそれぞれの背景を知るようになっていったし、特に日本語訳作業においては、『讃美歌２１』ではどう訳されているか、『聖歌』ではどう訳されているか、比較してみると楽しく感じられるようになった。そうやって、だんだんと賛美歌への興味もわき、編集委員会に出席するのが楽しみになってきたのである。

特に『讃美歌２１』は、1960年代から始まる現代の神学的課題をモチーフにした新しい賛美歌創作運動―ヒム・イクスプロージョン（賛美歌爆発）―の賛美歌が多く収録されている。これらの賛美歌に出会うことで、教会のこれからの礼拝にふさわしい賛美歌とはなにかを問われることになったし、これらの新しい視点には目開かれる思いだった。

『讃美歌２１』の出版と同時に、賛美歌学、礼拝学の本が多く出版されるようになっていた。そこで、同じ編集委員であった江原美

～　新生讃美歌のあゆみ　～

日本バプテスト連盟創立	1947年
「新生讃美歌Ⅰ」	1957年
「新生讃美歌Ⅱ」	1963年
「新生讃美歌Ⅱ」改訂版	1966年
「新生讃美歌Ⅲ」	1982年
「新生讃美歌Ⅳ」	1984年
「新生讃美歌」	1989年
「新生讃美歌増補Ⅰ」	1997年
「新生讃美歌増補Ⅱ」	1999年
「新生讃美歌」	2003年

歌子さんと近隣の音楽主事、菊地るみ子さん、大矢公子さんらと月に一度集まるようになり、「教会音楽研究会」（他に同名の由緒正しい研究会があるが・・・）と称して、読書会をはじめた。これは読書会にとどまらず、研究会の企画をもした。1997年8月に『新生讃美歌増補Ⅰ』が出版された後には、この『増補Ⅰ』を評価してもうおうと教団讃美歌委員の小海基牧師（荻窪教会）をお呼びして評価をお願いしたり、古澤嘉生先生からは、ヒム・イクスプロージョンの賛美歌についての発表をしていただいたりもした。残念なことにその後この研究会は立ち切れになり、研修会費の残額、数百円を預金したままの通帳は、いまだに私の手元にある。（メンバーの皆さん、ごめんなさい。そのうち、これをもとにまた研修会を企画しましょう！）

編集委員会に出ることで、私の賛美歌の学びが始まった。今も、『新生讃美歌』を歌うごとに、その曲について様々に議論した編集会議を思い起こしながら歌っているし、考えさせられてもいる。牧師は、ある意味、礼拝のデザイナーとしての力をも求められるが、賛美歌を知るということは、このデザインをするのに非常に役立つ。そして、これからは今まで歌われてきた賛美歌を知るだけではなく、私たちの礼拝で歌われるにふさわしい賛美歌の歌詞、曲とはどのようなものであるか考えていく必要があるだろう。『新生讃美歌』は、完成版ではない。これをもとに学び、これに改良を加え、バプテスト教会に必要な新しい賛美歌集を創作していく出発点となる賛美歌集である。そういう意味で、バプテストみんなの賛美歌集だといってよいし、ここから学びも続けられるのである。

礼拝に集う人々が、歌うことによって心立ち上がり、神に心を向けることができる、そんなよい賛美歌を受け継ぎながら、また新しい言葉を求めていきたいと思う。

ところで、私が牧師をしている相模中央教会では、音楽主事の江原美歌子さんが毎月、今月の賛美歌紹介を書いてくださっている（教会ホームページにアップ）。そのうち新生讃美歌解説集が出されることになるだろう。このようにして、いつも賛美歌の学びは続いていくのだと思わされる。それは、私たちの礼拝が新しくいきいきとするためにどうすればいいかといつも祈り考えている心が、そうさせるのだろうと思う。

（日本ﾊﾞﾌﾟﾃｽﾄ相模中央ｷﾘｽﾄ教会牧師）

新生讃美歌ＣＤ制作裏話

CD制作担当委員：岩崎光洋（福間教会自由ヶ丘伝道所）

去る7月23日、待望の新生讃美歌CD「心こめて主をたたえ」が発売になりました。今回は制作時のちょっとしたエピソードをお分かちしたいと思います。

演奏者の方々のスケジュールを伺いながらレコーディングスケジュールを組んでいた時のことです。皆さん仕事にも、演奏にも忙しい方ばかり。

ある曲のレコーディングで、かろうじて全員のスケジュールが1月8日なら合うということが解り、そこからホール探しが始まりました。インターネットで東京～横浜のホールを色々とあたりましたが、少々タイミングが遅かったせいもあり、どこも既に押さえられていてなかなか見つかりませんでした。

横浜、川崎あたりは全滅で、（狛江市もあたりましたが）東京23区を順々にあたって、確か15番目に港区を調べたら高輪区民センターホールが、その前後はすべて予約が埋まっていたのに1月8日だけきれいに空いていたのです。　私は主の導きだと大いに感動し喜びましたが、しかしそれだけでは問題解決ではありません。

このホールは区民センターですから、港区在住の人か港区に勤務している人なら安く借りられるのですが、そうでないと使用料が倍になってしまいます。この時初めて知ったことですが、東京には多くの連盟加盟教会がありながら、驚いたことに港区には１つも無いのです。

他のホールはどこも地元の教会の方に予約をお願いしていたので、困ったことになったと思いました。この予約空きを見つけたのは日曜日の朝だったと思いますが、CD制作委員の一人で、すぐ隣の品川区にある大井教会の音楽主事の菊地るみ子先生に電話をして、

「大井教会なら、港区在住の人が１人ぐらいいますよね？　今日は日曜日ですし、港区民を探して頼んでみてください。早くしないと他の予約が入ってしまいます。」とお願いしました。

夕方になり菊地先生から電話がかかってきました。

「よし、つかまったか」と思い電話に出ると、

「ゴメン、誰もいなかったよ。どうしよう。」

私が「う～ん……」と唸っていると、電話の向こうで菊地先生の横を、大井教会の執事の平野氏が通りかかったらしく、

「あ、岩崎君ちょっと待ってて……平野君、あなた住んでるの港区？　あ、違うの……会社はどこだったっけ？……岩崎君、今、見つかった！」

港区内の会社に勤務していた平野氏は、翌日、会社の昼休みの合間を縫って、わざわざ地下鉄で高輪区民センターまで行ってくださり、予約手続きをしてくださったのでした。

今回のCDは、このように多くの人々の協力によって完成に導かれた「協力伝道」であり、神様が道を開いてくださったからこそ成った「神様の作品」だと思わされたプロジェクトでした。ぜひ皆さん、このCDを協力伝道の実として大いに用いてください！

第７回全国礼拝音楽研修会だより

２０１０年８月２３日～２５日　日本バプテスト連盟天城山荘にて、
第７回全国礼拝音楽研修会（教会音楽専門委員会主催）が行われました

研修会テーマ：　へだてを超える礼拝　～わたしたちの献身
主題聖句：フィリピの信徒への手紙2章3～5節
基調講演：「へだてを超える礼拝」
　　日本バプテスト連盟宣教研究所　所長　濱野 道雄
ゼ　　ミ：　Ａ「礼拝プログラムとチーム作り」
　　Ｂ「賛美歌学」
　　Ｃ「コード付けとアレンジ」
　　Ｄ「教会音楽の価値観」
分 科 会：　実技分科会　１０
同時開催：　バプテスト・キッズミュージカルキャンプ
参加人数：　１６５名（ゲスト、スタッフ等含む）

２５年ぶりに天城山荘で全国礼拝音楽研修会が行われ、北は山形、南は鹿児島まで総勢165名が集められました。（バプテスト同盟、保守バプテストからの参加者7名を含む）。

これまでの６回の礼拝音楽研修会を通して導かれたテーマと主題聖句（上記）が、基調講演担当の濱野道雄師を通して紐解かれ、３日間のプログラムがそれを基に展開していきました。

「賛美と証しの夕べ」では、ゲストとして韓国からチャ・スジョン氏（韓国バプテスト神学校）をお迎えしました。前半では豊かな賜物が用いられ、韓国のリズムと音楽にのせ作曲された詩篇歌他の演奏があり、後半の証しでは、ご自身の体験を通して「神様が私たちに何を求めておられることを知る（求める）」ことの大切さが語られました。最後に、濱野先生によるメッセージと応答の祈りの促しがあり、それぞれの献身の思いが祈りとして捧げられました。

分科会は「オルガン（リード・電子）」「ピアノ（基本・応用）」「指揮」「聖歌隊」「教会形成と賛美歌（賛美歌創作）」「ギター」「会衆賛美を豊かに」「司式・司会のあり方についての分かち合いと討議（コミュニケーション法）」の１０分科会、ゼミは「礼拝プログラムとチーム作り」「賛美歌学」「コード付けとアレンジ」「教会音楽の価値観」と分かれ、実技を助ける学びとして新設されました。ハードなスケジュールではありましたが、「もっと学びたい」との声も聞かれるほどで、どの分科会・ゼミも熱心に研修されていました。

また、今回嬉しかったのは子どもプログラムの充実です。ミュージカル指導の講師が与えられ、バプテスト・キッズミュージカルキャンプという内容で、子どもたちと一緒にミュージカルを作っていきました。（詳細は、福岡連合からの報告をご覧下さい。）以下参加者の喜びの声、感想をお届けいたします。

（教会音楽室長　江原美歌子）

研修会に参加して　　～報告と感想

分科会　＜リードオルガン＞　　講師：伊藤園子

洋光台教会　　二村尚美

　指導してくださった伊藤先生からは、リードオルガンの構造、レガートに弾くための運指法やペダルの踏み方等の技術的な事や、奏楽者としての心構えを丁寧に教えていただきました。

　この学びを通して特に心に深く感じたのは、リードオルガンの音色の深さ、魅力です。リードに空気を送り込む事によって音を奏でるその音色は、人間の声にも近く、心に寄り添う響きでした。聴いていると心に沁みいる音に思え、一人一人の声が違うように、同じ曲を弾いても、その人によって不思議と音色が変わるのも、また魅力に思います。

　先生から研修中、何度も「息を感じて」と言われました。また、「私がオルガンを鳴らす」「いかに上手に弾こうか」と思わないで演奏しなさいとも言われました。様々な状況の中にある人達を少しでも身体と心を緩めて神様の方に向けて、み言葉を聞く状態になってもらえるかどうか。そのためには、神様からまず自らが霊の息を頂き、音符にその息を吹き込んで、会堂全体を包み込むイメージを持って、弾くのが大切ですと教えて頂きました。これからは共に礼拝をしている会衆の息をしっかり感じようと努力して、奏楽のご奉仕をしていきたいと思います。

分科会　＜電子オルガン＞　　講師：青野詔子

三鷹教会　　平沼真子

　メンバーが５人のこぢんまりとした中で、それぞれの奏楽を聴きあい、先生にアドバイスをいただく時間をいただきました。その中で、会衆を思いやり、丁寧にテンポ、音量、息継ぎ、タッチに配慮していく作業の必要性を知りました。

　また、さまざまな曲をご紹介いただき、曲のなりたちを知る中で、作曲者やその時代に使われた楽器も含めた背景を通して、主の恵みの奥深さを知り、時代を超えてあらたに賛美できる喜びを感じました。 おだやかにしっかりと、でもユーモアのある、とってもチャーミングな先生のご指導と、メンバーの気づきあいと支えの中で、そして、研修会に送り出してくださった教会との交わりの中で、奏楽させていただける恵をあらためて感じた３日間でした。

分科会　＜指揮＞　　講師：山中臨在

大泉教会　　上杉道子

　全国から18名の諸兄姉が、譜面台と自分の曲を携えての参加でした。私自身、指揮法の研修を受けたのは随分昔のことでもあり、全くの初心に返っての学びとなりました。 5時間半に亘る研修内容は、山中先生の用意されたConducting Drill Sheet 5枚がテキストでした。

　日頃適当に指揮棒を振ってきた私にとっては、拍子、速さ、強弱、休符といった譜面上のことだけではなく、伴奏者とのアイコンタクトや前奏の入り方に至るまで新鮮な学びでした。 1日目の晩は、床に就いても変拍子やシンコペーションの振り方が、頭の中をグルグルめぐって寝つけないほど緊張しましたが、誉め上手でしかも適確なアドバイスを下さる先生のお人柄で、終始会場は和やかな雰囲気に包まれました。又即興でピアノ伴奏に当たって下さった吉野先生にも感謝致します。

分科会　＜ピアノ基本＞　　講師：美登恭子

瑞穂教会　　台原真理子

私は中学生の頃から奏楽の奉仕をしています。奉仕といっても、言われるままに何となくという感じで始まり、礼拝音楽とは、会衆賛美とは、奏楽とは、ということを改めて考えたことはありませんでした。

今回初めて研修会に参加して、ピアノの技術はもちろん、奏楽者としての心得・姿勢を学ぶことができ、とても良い機会となりました。今までは何気なく音符ばかり見て練習していた賛美歌も、研修会に参加してからは、歌詞をよく読み意味を考え、賛美しながら喜びをもって奉仕することができるようになりました。また、瑞穂教会の礼拝音楽における課題をみつけることができ、今後皆で話し合いの場を持ちたいと考えています。神様に出会う礼拝を皆が一つとなってささげることができるよう、私も礼拝チームの一員として奉仕していきたいと思います。

分科会　＜ピアノ応用＞　　講師：菊地るみ子

筑波教会　　坂部篤子

『新生讃美歌』から課題曲2曲、それぞれの節に違う伴奏をつけるようにと課題がありました。自分なりに詞を読みイメージを持ってピアノに向かいましたが、思うように弾けず歯がゆさを感じつつ、でも同時に精一杯の準備を見ていただいて、さらにアドバイスがもらえることを期待し参加しました。分科会の中で順に発表をしたことは想像以上の緊張でした。るみこ先生から具体的な弾き方のアドバイスを各人が受け、初めて披露した時とアドバイスを受けてからの音色がまったく違うのを全員が実感したことでしょう。私自身も音の広がりの楽しさを感じつつ、一曲一曲の持つメッセージや証のことばを表現するということ、また、曲と自分の信仰が一つになっていくという奏楽の準備の過程で大切なことを教わりました。主の恵を感じる時間でした。

分科会　＜聖歌隊＞　　講師：有銘哲也

相模中央教会　　奥田光子

はじめて全国礼拝研修会に参加しての分科会。聖歌隊でぜひ学びたい、と熱い思いでやって来ました。天城山荘２階のピロティに行くとすでに席は大方埋まり、最前列の有銘先生の目の前の席に誘われスタートしました。目標は「言葉の表現を深める」で、神様へはもちろん会衆や求道者へ言葉を明確に語らなくてはならない、とのことでした。

私は大変緊張していましたが、先生のきさくな人柄にふれ、発声練習でまっすぐな声を出していくうちに、リラックスして臨むことができました。課題曲３曲をこなすには、学生時代の部活を思わせるハードさもありましたが、途中先生が学ばれた、イタリアでの話や面白話をしてくださり、楽しく練習することができました。そして「まとめの時間」には、心を込めて『主にすべてを』を賛美することができました。感謝致します。

分科会　＜ギター＞　　講師：岩崎光洋

横浜ﾆｭｰﾗｲﾌ教会　　高橋健太

私は今までのギターのキャリアの中で、人から集中的に教わるという機会がありませんでした。そのため、今回の研修会の案内を始めて見たときから大きな期待をもって天城に行きました。そして、今回気付かされたことは、自分の癖は自分ではなかなか気付かないということです。普段は自己流で練習し、人から指摘されるということがあまりない自分にはとても大きな経験で、目からうろこが落ちたような気分でした。教会音楽は自分の好みや得手、不得手を関係なく曲を弾くことが多いので、今回の経験は自分の技術を磨く良い機会になったと思います。最後になりましたが、このような機会を作ってくださった教会音楽室、講師の皆さまに感謝したいと思います。非常に恵まれたひと時でした。

分科会　＜会衆賛美を豊かに＞　　講師：小松澤 恵・江原美歌子

市川八幡教会　　松浪衣子

「会衆賛美」は教会音楽の中心であり、すべての人が参加する礼拝の部分であること、音楽奉仕者は会衆の目的とニーズに仕えるものであることを確認しました。その上で、よい会衆賛美を作り上げるためには長期的な計画と訓練が必要なこと、その実際的な方法を、様々な賛美をうたいながら体験しました。そして『新生讃美歌』についての学びを深めました。

参加者の山口麻衣子姉（相浦光）より、愛唱歌を通じての証しを伺うこともでき、感謝です。

普段は「うちの教会」での礼拝を考えますが、今回の研修会で「私たちの連盟」の視点で自分の教会や礼拝プログラムを相対化してみる機会を頂きました。私も会衆賛美の一員として、皆が声を合わせて主を賛美できるように祈って準備していきたいと思います。

分科会　＜教会形成と賛美歌（賛美歌創作）＞　　講師：吉高　叶・福永保昭

平塚教会　　古田真里

今までは単純に、賛美歌の歌詞の素晴らしさ、メロディの美しさに気持ちが動いていましたが、宣教論と賛美歌について教えていただき、改めてことばの大切さ、奥の深さを知りました。神さまが私たちに与えて下さった賛美の恵みをより一層喜びたいと思います。また、教会形成の視点で賛美歌を選び、時には自分たちの教会にあった賛美歌、リタニーを創作してみるのも良いことだと伺い、賛美歌創作がより身近に感じられました。　その後、参加メンバーが限られた時間で創作した賛美歌を聞き合い、それぞれがとても素晴らしく、感動しました。たくさんの恵みをいただき、神さまとご指導いただいた先生方に深く感謝いたします。

分科会
＜司式・司会のあり方についての分かち合いと討議（コミュニケーション法）＞
講師：川平朝清

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ教会　　山本千晶

分科会の中で一人ひとりが聖書を朗読する課題が与えられ、集められた14名が川平先生の簡潔なアドバイスにより、生き生きと朗読されました。「伝える」よりも「伝わる」メッセージを。冒頭で伺った先生の言葉が頭に蘇りました。「きく態度」「話す態度」には、相互のコミュニケーションが大切。「聞く・聴く・訊く」様々な表現で表される日本語。国語は習っても日本語は習っていない私たち。「口下手ほどメッセージは伝わる」と、一見矛盾するかのようなお話しに、ハッとさせられました。その理由は、言葉だけでは伝わらない「心のこもった表現」がなされるから。礼拝という神さまとの出会いの場所で、言葉を発する場面において「心をこめて」発声し「伝えるのでなく伝わるメッセージ」を携えて神さまに導いていただく者になること。

研修会を終えて、礼拝における心備えが養われ、私は変えられました。この恵みを携えて、今日も礼拝を捧げました。感謝します。

キッズミュージカルキャンプ　　ｷｬﾝﾌﾟﾁｬﾌﾟﾚﾝ：秋山献一
講師：荒井三枝子

相模中央教会　　岡澤友真

8月の23日～25日にミュージカルキャンプに行きました。

ぼくは王様の役をやりました。セリフを大きく声に出していうことや、王様のように、と言われていたので大変でした。発表の日には、間ちがえることなくはっきり言うことができました。セリフが言えた後は、はーっとため息をつきたくなりました。できた時はとてもうれしかったです。他の人も、みんなうまくて、ちゃんとできたと思いました。 三日間、とても大変だったけれど楽しく、またやりたいです。

地方連合音楽委員会ネットワーク

2009年9月8日～9日に、地方連合教会音楽担当者会が行われました。地方連合の音楽担当者の方々から、「同労者の繋がり」～ネットワークへの希望と期待が語られたことは、『新生讃美歌ニュースレター』第２５号挟み込み『地方連合教会音楽担当者会報告』で岩崎光洋専門委員の記事でもお伝えしたとおりです。

教会音楽室では、様々な教会音楽に関する情報を提供し、また共有できるよう、さらに『新生讃美歌ニュースレター』及び、ＰＣによるネットワークマガジンを充実させていきたいと考えています。

今回は**福岡地方ﾊﾞﾌﾟﾃｽﾄ連合教会音楽委員会**の**加藤美代子さん(姪浜)**から寄せられた、①第７回全国礼拝音楽研修会報告　②福岡地方連合井戸端会議報告（福岡地方連合教会音楽担当者会議の報告）をお届けします。

第７回全国礼拝音楽研修会（天城山荘）キッズ・プログラムに参加して
ー福岡地方連合教会音楽委員会の委員研修としてー

今回の全国研修会は、初めてこどもプログラムが設置された。　キッズキャンプとしておとなプログラムと並行して行う、子どもミュージカル分団である。対象は幼稚園児、小学生となっていた。教会での子どもに対する音楽指導の仕方はなかなか学ぶ機会がないので、大人であるが子ども分団に出ることはできないかと尋ねてみたところ、許可を頂いた。結果としてこれを選択してよかったと思う。19名の子どもと、講師（荒井三枝子さん）、伴奏者（大津則子さん）、チャプレン（秋山献一牧師）と私で4人の大人によるクラスとなった。初日、自己紹介、ゲームの中から少しずつ先生の伝えたいもの、ミュージカルに必要な事柄を見せてくださる感じである。先生の指導は、子どもであろうが、要求を落とさず真摯に向かい合う、という印象だった。ふだんから子どもミュージカルの教室を指導していらっしゃるとのこと。合計10時間ぐらいで、ほぼ初対面の幅広い年齢層の子どもたちが一つのミュージカルを創り上げるために、先生は小道具、予習ほか事前に出来る限りの準備をして臨んでおられた。指導は一見厳しく見えたし、子どもたちも慣れない状況に驚いているふうであった。しかし練習時間以外の毎回の食事の時も、先生は責任をもって子どもさんと関わり、世話をしながら積極的に話しかけて溶け込もうと努力され、疲れを見せず精力的な姿勢でいらした。もう少し時間に余裕があれば、もっともっと子どもたちは先生と楽しい交わりができただろうなと思う。真剣なおとなの姿、自分たちにぶつかってくる大人の姿を見せるのは、子どもたちにとっては当惑もあるが、何かを創り上げる時、そうでないと物事はできない現実を感じ取らせるものでもある。

題材は、旧約聖書のダニエルがライオンの穴に投げ込まれる物語とシャデラク・メシャク・アベデネゴが火に投げ入れられる話の２話をつなげたものであった。事前に参加者には歌の楽譜とCDが送付されていたので予習が前提であった。自己紹介では早くも子どもたちの個性が発揮され、楽しいものだった。この間、先生はそれぞれの特徴をよく把握しようと努めておられた。ゲーム「ダルマさんが転んだ」では演技を止める（ﾌﾘｰｽﾞ）が劇では効果的なことを教えて頂いた。

この研修の期間、先生は、今からしようとしていることは学芸会（誰でも出番があるように配分されて、適当な演技でセリフも聞こえず不出来でも、舞台に上がっているだけでほめられる甘い仕上がりのもの）ではない、真剣でかつ楽しい舞台を、出来る限りの努力で創り上げる体験だということをなんどもおっしゃった。

歌を歌いながら発声の仕方に触れられたが、いわゆる子ども聖歌隊のような合唱との声の

発し方とはミュージカルは違うのだということをはっきりと説明された。楽譜通りに正確に歌うのはもちろんで、不正確であったり譜面と違うように変えて歌ったりというのは原則として控えなければならないが、発声の面では自分を周りに合わせる必要はなく、自分が何かを伝えたいという思いを声に乗せてはっきり伝えるのが最も大事だという指導であった。

発声練習では早口言葉を楽しく行った。自分で創作した言葉を言う子もあったようだが、それもミュージカルでは大きな楽しみなのだと先生はコメントをされた。歌い方や発声に慣れないため、声を潰すことがないかと質問したところ、子どもはだいたい声が小さいので、大きい声を出すのに慣れていない、だから歌でも声でもまずは大きい声を出すということを目標に指導するのだということを教わった。ここで声の大きさは舞台のある会場の端に届くほど、との注意があった。

引き続きオーディション――大げさに感じるかもしれないが、要は自分が希望する役になれるか、意思表示をしたあと演出者（お客さまの目の代表）によって決定される体験――を行った。希望することと決定されることの違いで葛藤が起こるが、そこはお客様に喜んでいただけることがミュージカルの本道なのでそれを理解しなければならない、悔しさもその視点で克服するのだという説明であった。オーディションをしながら動きや言い回し、立ち位置についての指導をひとりひとりにされた。どんな子も大事にしようという気持ちが終始伝わった。役を与えられた者は全体の中で多くなく、役を希望したのになれなかった人の悲しみの分までその責任を果たすのだとの気構えを述べられた。それで役（セリフ）のついた子に対する要求はより高いものがあった。セリフを覚えることもより真剣にということで、時間外に練習をしていた姿もあった。先生が付き合っての部分もあった。うーん、ハードな研修！

一緒に小道具を作ることは楽しかった。先生はひとりでよくここまで細かく準備されていると感心した。これらの衣装は子どもたちが研修後持ち帰った。

ダンスを習っている子がいて、ライオン4頭の踊りに指名された。全体指導から細かい振付まで先生は全体をよく考慮され、全部自分でやって見せて指導されるのだから、その労力は見上げたものである。私はダンスの振りなど全くやったことのないのだが、全員での練習をしたら楽しかった。楽しいながらもミュージカルをするときに大事なことのエッセンスを、限られた時間と条件の中で懸命に伝えようとしておられると感じた。伴奏者の方とのやりとりも楽しかったし、中継中の子どもたちと彼女との温かいやりとりを見ているのも楽しかった。

「こんなに厳しくなく求めなくてもいいのでは」と思うこともあったが、本番は目の前、真剣舞台ということを一緒に考えるとそうも言えないし、子どもたちも一生懸命それに答えて努力していたと思う。先生の厳しさ、真剣さと温かさの双方を感じた研修であった。本番の時はできるだけやってここに臨むのだという感激があったし、ひとりではなく一緒に創り上げてきた苦労・喜びというものが胸に迫った。先生は良いものを神様に捧げたいという気持ちでこれを指導されたのだろう。知らなかったことをたくさん知ることができた。教会の活動に生かすという観点では、今回のものを少しシンプルにすれば練習・指導が可能なのでは、との先生の助言を頂いた。

このクラスに、ひとり動きの多い子どもさんがいた。同じことをずっと繰り返したり、部屋を出て行ったり大きな音を立てたりするが、先生自身が最初からこの子によく関わって、チャプレンの秋山先生や伴奏者の方も積極的に接せられ（たまには彼を追いかけ）ていた。その他の事務局スタッフのかたもよく関わってくださった。彼の仕方で最後までみんなと一緒に過ごし、長い練習に参加し、実にうれしそうにその音楽とその場を楽しんでいた。もちろん本番も一緒にちゃんとやった。この子は講師の先生と同じ教会で、講師の先生がぜひ彼に来て欲しいと言って声をかけられたと聞いて、大変嬉しかった。今回私は娘を久山療育園のキャンプに、いろいろな方の手を借りてお預けしてきた（感謝！）ので、大人の気楽さの中で来たつもりだったが、いわば娘と似たようなお子さんにこの場で出会い、娘とは違った経験だが一緒に行動し、なんだか驚くと同時にこれは神様のお導きであり、漠然とした私の問に対する主の答えだと思えて、深く感謝した。これからの教会での活動のヒントと励ましを、思いがけず具体的に頂いた気がした。

音楽担当者が孤独にならず、お互い励ましあえる関係作りを求めて
福岡地方連合の試みをご紹介します。

教会音楽井戸端会議開催

福岡地方連合では去る１１月９日に「教会音楽井戸端会議」なるものを開きました。「井戸端会議」？、なにそれ。と不思議に思われる向きもあるかもしれません。委員会では今年度、各教会・伝道所で音楽奉仕に携わる人たちが、孤独にならず、お互いに励まし合い、建て上げていけるような関係づくりをめざしたいと話しあいました。講習会・研修会も意義深いことですけれど、奉仕者どうしの横の関係を結ぶことも大切ではないかと思ったのです。奉仕者には会衆賛美の選曲をする人、礼拝のプログラムを立てる人も含まれます。奏楽者、聖歌隊員、その指導者、音楽関係の執事や委員の奉仕をしている人など幅広く考えましたので、今回の出席対象には牧師・音楽奉仕者ほか関心のある方も呼びかけました。

連合では以前から時々アンケートを行って実態を把握する努力を行ってきました。前年度までの集計結果などからどのような課題があるか予測してこの会議に臨みましたが、直接には今年度秋に改めてアンケートを取って今どのような要望や課題があるのか調べました。各教会・伝道所に郵送およびメールで送って回答を募ったところ結果的には５０％を越える回答率となり、皆さんの協力に感謝するとともに関心の強さを思わされました。

始めは小礼拝として、賛美を歌ったり紹介（新生讃美歌４４番、１５２番）したり、前委員長の加来国生牧師に民数記21章16節～18節 より「井戸の水よ、わきあがれ、人々よ、この井戸のために歌え」と題して《井戸掘りの歌》の説教をしていただきました。霊的生ける命の水を求めて、賛美の奉仕に立てられたものは、教会の奉仕すべてのために応援隊として自らの井戸を掘るーすなわち礼拝で賛美の務めを、労しつつ果たすのです。

いよいよ「井戸端会議」では一同に会してふだんの問題意識や課題、恵みなどを話し合いました。最初に元委員長の藤　寿牧師に「礼拝と賛美について」、連合の教育委員をしておられる深見照明氏に「子どもたちを対象とした音楽ー実践の報告」と題してそれぞれご発言をいただきました。藤先生からは、主を拝し、神を神とするそのことのために礼拝の音楽奉仕はなされるべきであって、技術のどうこうよりも大切なものがあるとのご指摘をいただきました。一方深見氏は、教会で子どもさんに対して行っている実践を２例ご紹介くださいました。実際お見せできないのが残念ですが、大人も子どもも楽しめるとはこういうことか、

と体でわかる楽しい事例でした。日常で使う品を工夫して、仕掛けを作り、自分も楽しめるコロンブスの卵のような発想を、教会の子どもと接し、学ぶいろいろな場で私たちももしかしたらやれるのではないか？というような希望を抱かせられました。筆者も経験がありますが、何にせよ、楽しく紹介されたときそれは相手の心を開き、やる気にさせるものです。ただ、その仕掛けがあまりに抱腹絶倒、面白かったので心配になった司会者が「いつもこうなのですか」と心配する場面がありましたが、「いつも」というわけではないということでしたので、他の出席者も安心していました。

お二人に刺激され、それぞれの気持ちを表現する中で出てきたことは数多くありますが、（出席者は約１６名でした）「牧師と音楽担当者との信頼関係と協力が肝要」といって恵みを語ってくださったり、「楽譜の読めない人が多数いる現状を理解の上奉仕していきたい。しかし音楽を学んだ方も努力していないわけではなくて一生懸命だということを知って気持ちを新たにさせられた」、「礼拝の中で４割の時間を占める音楽の部分をもっと充実したい」「多様な人々とともにある音楽を追求したい」などの指摘がありました。会衆賛美の新しいレパートリーが増えずに悩むという投げかけもありましたがそれに対しては幾人もの人がいろいろな工夫の具体例をあげました。そのほか使用賛美歌についても活発な意見が上がり、今採用している理由についてもそれぞれの思いが伝わって励まされました。

また、新しい楽譜や文献を持ち寄って展示し、紹介しました。連盟教会音楽室からは聖歌隊楽譜、およびピアノ奏楽のための楽譜の注文の仕方の資料を提供いただきました。

今度はこの話し合いを基に２月に新しい賛美を知る研修会を予定しています。委員長の任期は２年なので来年度は今年度を基礎として研修などを設定すると思います。また、委員会の方針をより深めていくつもりです。さて当初の目的であったお互いの「励まし合い」についてはどうだったでしょうか。顔と顔を合わせて対話するというのはとても意味が深かったと思います。知り合いになる、だけでもまずは良いと思います。これを機会に少しずつ仲良くなっていろいろなことを話し合えるようになればそれは大きな実りだと思います。

（2009年度に報告を頂きました。掲載が遅くなりましたことをお詫び申し上げます）

お寄せ下さい！

地方連合の試み、研修会、その他教会音楽に関するニュースをお寄せ下さい。
ニュースレターに掲載いたします。
情報の分かち合いに、ぜひご協力下さい！